

SEMINAIRE OUVERT 2003

Journal Mensuel Gratuit No.7-26 12 août 2003

月刊

セミナー通信二〇〇三 第七号

二〇〇三年八月二日発行

公開セミナー 2003 『心的構造論』

藤田博史 (精神分析医)

第8回第8講

「多世界論理と精神病理 (その3) ——多世界としての躁鬱病」

2003年8月23日(土) 13時30分-16時30分 (開場時間も13時30分になります)

会場: 日仏会館 501号室 聴講料:1000円

日仏会館 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 JR 恵比寿駅東口から「歩く歩道」経由で徒歩10分

主催: ユーロクリニック

協賛: ドール・フォーラム・ジャパン

問合せ先: ユーロクリニック文化部

TEL: 042-308-7637

E-mail: ys@euroclinique.com

SÉMINAIRE OUVERT 2003

FUJITA, Hiroshi (psychiatre-psychanalyste)

Le 8ème SÉMINAIRE

Samedi 23 août 2003 -----13h30-16h30 SALLE#501 DE LA MAISON FRANCO-JAPONAISE

Frais de participation :1000yen

LA MAISON FRANCO-JAPONAISE 10 min.à pied depuis la Sortie Est de la Gare d'Ebisu(ligne JR Yamanote)

Organisation:L'EUROCLINIQUE

Collaboration:DOLL FORUM JAPAN

Renseignements:BUREAU CULTUREL DE L'EUROCLINIQUE

TEL: 042-308-7637

E-mail: ys@euroclinique.com

目次

| | | | | |
|----------------|------|-----------|--------------|----|
| 公開セミナー第8回案内 | 1 | ヨーロッパ美術紀行 | 清水由美子 | 10 |
| 『セミナー断章』藤田博史講義 | 2~7 | 「知」のレッスン | 榊山裕子 | 11 |
| ピブリオフィリア逍遙遊 | 伊藤 敬 | 8 | セミナー、フジタゼミ予告 | 12 |
| ブレーキを踏もう | 佐藤良平 | 9 | | |

発行
EUROCLINIQUE
編集
ユーロクリニック文化部

SÉMINAIRE OUVERT 2003
公開セミナー 2003 『心的構造論』より

「セミナー断章 2003」第6回

講義 藤田博史

編集 榊山裕子

Le 6ème SÉMINAIRE

第6回第6講 「多世界論理と精神病理 (その1) ---多世界としての無意識」より

samedi 5 juillet 2003

2003年7月5日(土) 日仏会館

(『セミナー断章』は、公開セミナーのご紹介として、講義より断片的に抜粋して掲載しています)

「多世界」について

何故「宇宙」という言葉を使わないで「ワールド」という言葉を使うのか、というと、人間の存在を前提としているからです。もし宇宙のどこかの星に、人類と同じような形態を持った生き物がいたとしたら、そこも「ワールド」になるのでしょうか、「ワールド」と「コスモス」の違いは、やはり人間の存在を前提としているか、していないか、ということだと思のです。

「可能世界」というように「世界」というのは、さまざまな人の存在を前提としていますから、集団を作る人間の性質によって、様々な「世界」が作られていくわけです。国の単位は一つの「世界」でしようし、同じ思想を持った者同士というのも一つの「世界」でしょう。何かある一つの基準で人がまとまりを作った時、それを「世界」と呼んでいます。今まで述べてきた「可能世界」とか「平行世界」とか「多世界」という場合に、どうして「世界」という言葉を使うのかというと、そこに人の存在が前提となっているからなのです。今日のテーマは「世界」、それも「多世界」、「世界」というのは沢山あるのです。そういう「多世界論理」は、とりもなおさず人間の心、とりわけ「意識」の範疇から逃れているような範囲の心の領域、精神分析でいうところの「無意識」の領域にこそよくあてはまる理論です。「分析哲学」がかなり発達してきたにもかかわらず、「多世界」という考え方を直接、人の「無意識」とか心という一つの「世界」に当てはめて考える人がほとんどいなかったということは不思議なことです。

ですから分析哲学、論理学でもよいのですが、これは人の心にこそあてはまるのだ、ということをもう一度きちんと言い直す必要があると思のです。やはり「無意識」が「多世界」構造をなしているのです、先ず「無意識」があって、人はそういう「無意識」の「多世界」としての性格に気がついて、論理学や哲学を思いついたのではないか、という方が正しいのかもしれない。

夢の「世界」

この「アナザー・ワールド」だとか「ポッシブル・ワールド」を皆さんは毎晩経験しているわけでしょうね、「夢」として。夢の「世界」というのは、まさに皆さんの「無意識」の中に用意された「世界」であって、ありありと体験しているわけです。単なる想像した領域とか、小説のように活字で読んだ世界とかそういうものではなくて、形があり、登場人物があり、風景があり、

といった具合で、細部までつくりこまれた諸場面で構成されています。ふっと目を覚ましてみて「ああ、夢だったんだ」と気がつきます。これは卑近な「アナザー・ワールド」、「ポッシブル・ワールド」の例ですけれども、「夢」という形で、たまたまわれわれの「意識」によって認識されているに過ぎないのであって、夢のような細密なドラマが、われわれが目覚めている間でも「無意識」の中で同時に進行していると考えすることは、さほど無理のないことだと思います。前回は触れましたが、「多重人格」と呼ばれている人たちは、たとえば人格が5つあるとすれば、それは夢が5つあって、それらが同時に現実の中に出てきてしまっている状態です。つまりそれぞれの夢の中の主人公が入れ替わり登場してくるのです。

「意識」－「無意識」

「無意識」という言葉は、「意識」に否定の接頭辞を付けることでできあがっています。「意識」はドイツ語で *Bewußt(sein)* と言います。「無意識」は *Un* をつけて *Unbewußte*。このように否定形でしか表わすことが出来ないような領域――最初の名前の付け方が悪かったのですけれども、本当はね。「意識」に対峙するものとして定義を与えるような「無意識」という名前を付けたこと自体が間違っていたのかもしれませんが、もっとうまい言い方を考えていれば、学問としての精神分析は別の発展を遂げたかもしれないのです。いずれにしても「意識」という言葉をもとに「無意識」という言葉をつくってしまったのはフロイトの責任です。「無意識」とは、「意識」の守備範囲にない心の中の領域のことです。つまりわれわれが意識していないところで活動している心的な領域のことなのです。

たとえばどちらの領域が大きいかというと、意識している領域など非常に狭い。実際に患者さんに麻酔をかけたり、意識障害をおこしている人に接してみると、人間の「意識」というものは、とてつもなく広いようで、実はとても狭くて、本当に限定された、限られたものしか見えていないような能力、つまり限られたものしか見ることができないというか、ほとんどのものを見ずごしているという、いわば欠陥能力で――欠陥というのは完全ではない、という意味ですが――「意識」というものに絶大な信頼を置いている人がいるとしたら、わたしたちは「そうかな？」と思う必要があるわけです。

「意識」と「知覚」は密接な関係にあります。たとえば「見えるものの領域」。ヒトは「視覚」に大きく依存しているので、「見える」という領域と「意識」とが、ほとんど同じものであるかのような錯覚に陥っていますけれども、こういう「見えるものの領域」においても、「見えるものの領域」の全体がイコール「意識」ではない。見えてはいるが意識していない部分があるわけで、「見えるものの領野」に限っていうと、ヒトは見えるものすべてを「意識」しているわけではないということ、これが大前提です。

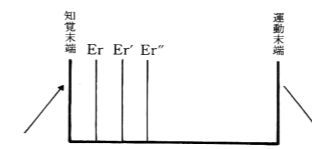
「知覚」と「意識」

「見えるものの領野」と言いましたが、見えている全体の風景があったとしたら、意識的である部分というのは、ごくわずかです。見えていても、この辺で何か起こっていても「意識」に直接入ってこないことがあるのです。でも見えている。つまり「見えている」ということと「意識」ということは全く同じというわけではない、ということです。つまり「知覚」と「意識」というのは、非常に密接に結びついてはいるのだけれども、やはり別個のものとしてきちんと区別して考える必要がある、ということです。

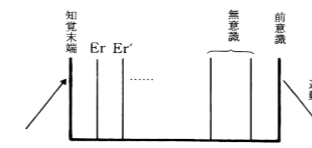
「知覚」と「意識」は違うのだ、ということを引きちんと分けて図に示したのがフロイトですが、『夢の解釈』という本、一般に『夢判断』という風に訳されていますが、英語では *The Interpretation of Dreams* です。interpretation ですから、「夢の解釈」とか「夢の翻訳」というような意味ですが、どういうわけか、日本の本は『夢判断』となっています。「判断」というのは、昔から占いの領域で使われている用語で、吉兆なんかを占う――歯が抜けたら親が死ぬ、とか――そういうレベルのものです。だから『夢判断』という翻訳は間違っていると思いますが、その中でフロイトはこういう図を描いているのです。(図1)



第1図



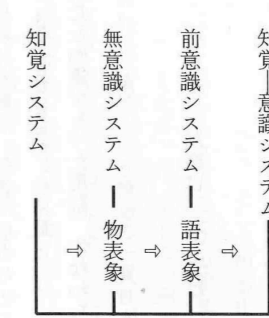
第2図



第3図

Er: 記憶システム

図1



……一次過程、快感原則、知覚同一性

……二次過程、現実原則、思考同一性

図2

「心的装置」

彼は心というものを一つの「光学機械」――光が一方の端から入って、もう一方の端からでていくような――に喩えたのです。インプット、つまり外的刺激が「知覚」として入って、結果としてヒトは「運動」を起こす。その中間の部分に「心的装置」がある。das psychische Apparatという風に呼んでいますが、そういう「心的装置」として心を考える。一番左に縦に何本か線が入っていますが、カメラのレンズみたいなものだと思ってください。光が入ってきて屈折していく過程。「心的装置」の中のサブ装置みたいなものですね。そこを光が通っていくことによって、ある種の処理を受けながら、最終的に運動器官を通して、「運動」として放出される。ヒトは常に何か「知覚」して、それを「運動」として出力している。

たとえば目でも物を見る、ということ。何かが見える、そこを横切るものがある。そうすると目線で追うという運動が生じます。何かが見える、それを追う、入力から出力までの動作が瞬時に起こっているわけです。電車に乗っていて、外の風景を見ている人の目を見ていると、目線が左右に振れている。これを「眼振」といいます。このように「知覚」と「運動」は非常に短時間の間に密接に結びついているわけですが、フロイトはとりあえずこういう風に考えました。で、その心の中でどんな屈折が起こっているのか、ということについて論じたわけです。そこでフロイトは「一次過程」と「二次過程」という区別をしました(図2)。

「一次過程」と「二次過程」

「一次過程」と「二次過程」という風に、その心的な処理の段階を分けます。まずは心的な装置の中に入ってくる情報というのは「知覚」によって分節された、つまり「知覚」によってそれと認識されたものです。この「知覚」というのは、何かを認識する。たとえば視覚だと、赤とかこういう形をしている、とかわかるわけです。だからここで何が作られるのかというと「知覚表象」が作られるのです。「表象」というのはドイツ哲学で *Vorstellung* という用語の訳語です。ラカン用語で言うと「シニフィアン」 *signifiant* です。まだ意味とは結びついていない何かある「差異」です。

「知覚」は何か知覚したものがいつまでもその装置のなかに留まり続けてもらおうと困るわけです。次の「知覚」が機能しなくなる。つまり「知覚装置」の特徴は、刻々と変化する「差異」に追従していくために、知覚したらすぐにそれを消しさるといふところにあります。つまりパッと知覚したら次の瞬間に消えている必要があるわけです。でないと大変なことになりますよね。街を歩いていると、見えているところは全部、人だらけになってしまうでしょう。パッと見えた人がパッと消えてくれないと、残像みたいに一回見たら10秒経たないと消えないなんていう状態だと、ぐるっと見ただけでブワッとものが見えてしまっ、おかしくなりますよね。だから「知覚装置」——「知覚装置」というのは一番端の一枚のレンズのことですけれども——その「知覚装置」の特徴は「差異」を瞬間的に作って瞬間的に消すという働きにあります。で、その次の段階というのが「記憶装置」です。人間の心の「記憶装置」。「記憶装置」は今度は逆です。そこに描かれたものを保持しておく、という働きです。つまり「知覚」で目まぐるしく「差異」が作られて、それが次の装置に運ばれる。そしてその装置の働きというのは「記憶」なのだ、ということです。では更に次に来るのは何かというと、そういう「記憶」、バラバラの記憶を結び合わせるような何か心的な働きがあるに違いない。バラバラに記憶されたもの相互を関連付けたり、結び合わせたりする働きが来るに違いない。そういうところに目をつけて、大きく、ここに描いたように「一次過程」と「二次過程」という風に区別しました。

何が違うか、というと、この心的装置の中におさめられている「表象」の種類が違うのです。ではどういう風に違うのかというと、「一次過程」の中で動いている表象は「物表象」、物に直接由来するような表象です。「二次過程」においては「語表象」です。

「物表象」と「語表象」

ですから動物とヒトの違いは——おそらく動物にも「無意識」はあるのですが、この心的な装置の中に貯えられている記憶の種類が「物表象」のみということになるでしょう——ヒトにおいて「語表象」、すなわち言葉の表象が貯えられている水準があるということです。左から右へ動いていく心的な過程の中で「物表象」が「語表象」と結びついて「意識」に立ち現われる、ということをフロイトは考えたわけです。ですから一番右側が「意識」の装置に相当するわけです。つまり「知覚」に何か与えられる。そして「知覚」において「差異」が形成される。刻々と時間軸に沿って変化するような「差異」が形成される。その「差異」はこの「心的装置」のなかで「記憶」として残される。知覚で作られた「差異」がそのまま直接、記憶として保存されているものを「物表象」と呼びます。つまり物の形であったり、色であったり、まだ言葉とは直接結びついていないような「表象群」です。これを *Dingvorstellung* と言います。

これとは別に、人間というのは読み書きを、他者から、ある意味、強要されるわけです、まずは音声、音声言語として入ってきます。たとえば何かあるものを見て、「これがマジックですよ」とか「ママ」とか「パパ」とか、要するに「知覚」に与えられたものに対して「語表象」が——一対一対応で、他者から教えこまれるわけです。そういう「語表象」も、最初の内は「物表象」の一部なのですけれども、だんだんその「物表象」と「語表象」のシステムが違うということがわかってくるわけです。その「語表象」というのは *Wortvorstellung* です。

「言語」と「言語活動」

最初の「語表象」も最初は「物表象」です。「ママ」という音に過ぎないわけですから。だんだんその「ママ」が「パパ」と違う、「ア」という音は「オ」という音と違うという風に、それぞれが互いに差異化されていくことによって、その「語表象」のなかでのひとつのシステムが出来上がってくる。それを言語学では「ラング」というのです。要するに「言語」です。だからこの「語表象」というのは、ある意味、その総体は「言語」です。ただしこの「語表象」の中で起こっている「運動」——「運動」というのは何かというと「語表象」が結びついては、あるものとくっついては離れるとか、色々と目まぐるしく語表象同士でくっついたり、これが一つの人間の、意識的にせよ無意識的にせよ、その「思索」ですが、「語表象」がくっついたり離れたりするこの運動——この「運動」のことを、*langue* に対して *langage* というわけです。*langage*、日本語に敢えて訳すと「言語活動」となります。人間の「無意識」というのは二つの表象の領野で構成されている。一つは「物表象」。つまり直接物に由来するような表象群。もう一つは「語表象」。「語表象」というのは言語による表象です。文字と音声。ヒトの無意識的な過程の特徴は、「物表象」と「語表象」が結びつくことによって一つの概念とか思考とか思索が生まれてくる、ということです。

『幻覚の構造』

皆さんが見ている「夢」についてフロイトはどういう風に言っているかというと、フロイトは「夢」というのは、こういう「物表象」が「語表象」と任意に結びついて、それが「意識」に上ってくる。だからこういう「物表象」がどういう形で「語表象」と結びついているか、ということの解明することが、夢の解釈に繋がる、と考えたわけです。

「知覚」と「意識」が重ね描きされているということが、この図（図2）ではちょっとわかりづらいので、これを少し変形させてみる。実はこれはわたしの『幻覚の構造』という本で書いたことです（図3 その1 その3）。では、これで何を考えたかということ、われわれはただ、何か「知覚」した、心的処理を得た、それを「運動」に移した、たとえばウサギが走っていった、見えた、目で追う、これは運動です、＜知覚—運動＞、こういうことを目まぐるしく繰り返しているのです。つまりアウトプットがまたインプットに戻ってくる、それがまたアウトプットされる。インプット—アウトプット—インプット。それらが目まぐるしく連続しているわけですから、「意識」は「知覚」にまた再入力される可能性があるわけです。だからわかりやすく単純化させて「知覚 *perception*」をPで表わします。「意識 *conscious*」をCで表わします（図3 その2）。この「変換器」、実はこのあるものを変換しているものこそ他でもない「ファルスのシニフィアン」です。これはラカン理論を勉強している方はなんとなくわかるでしょう。こういう順番です。＜知覚—ファルスのシニフィアン—意識＞。しかも「知覚」と「意識」が同じだということは、これはどうしてだかわかりますか。丸くしたことで「知覚」から「ファルスのシニフィアン」を経て「意識」、これがまた「知覚」に再入力される可能性がある、ということです。こうしてグルグル回る。

PC システム

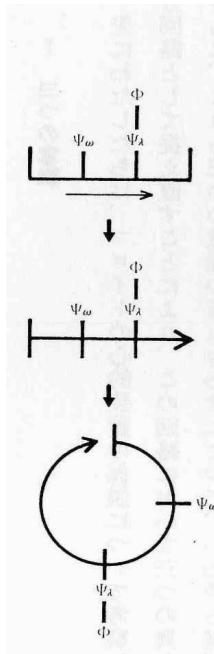


図3 その1

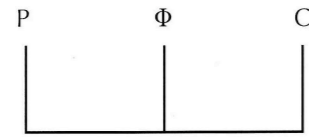


図3 その2

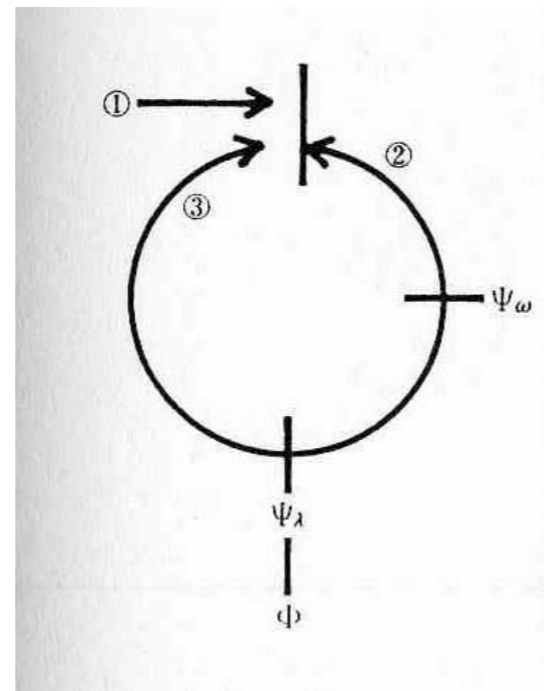


図3 その3

「知覚一意識システム」

つまり「心的装置」をこういう循環する装置に置き換えてみる、これが「知覚一意識システム」です。ある「情報」が入ってくる、「心的装置」の中に入る、「意識システム」から出てくる、そのまま「運動」に繋がる場合もあるし、また再入力されてここを回転する場合もある。つまりヒトの「心的装置」を変形させるとこういう形になる。

そしてここが一つのスクリーンです。要するに「知覚一意識システム」というのは「意識」と「知覚」の重ね合わせられた一種のスクリーンを構成しています。ですからわれわれが「知覚」しているものは既に純粋な「知覚」だけではない。つまり「心的装置」の内部からも「情報」がやって来る。かつ「心的装置」の外部からも「情報」がやってきている。この情報が「知覚一意識システム」で錯綜している。つまり多重に投影されている一種のスクリーンを「知覚一意識システム」は構成している。

動物とヒトの違うところは、既に「知覚」に与えられたものには名前が付いており、それと認識することができる、「世界」は「言葉」によって再分節されている、というように「知覚」に与えられたものを「言葉」によって再分節しているところです。それで通常はこの変換器を経ているので、色々な「物表象」があっても、それは「語表象」に変換されて「知覚」の中に投影されている。ところが、ここの変換器に何か異常が起こると、音声としてそのまま「語表象」が知覚領野に表われてくる。これが「幻聴」です。あとは視覚的な「物表象」が、あたかも外部から来た情報のようにそのまま「知覚一意識システム」に与えられたとしたら、それは「幻視」、つまり視覚性の幻覚になるでしょう。だからここで重要なのは「知覚一意識システム」に与えられる「情報」というのは、外部からのものだけでなく、「心的装置」の内部からもやってくる、ここでミックスされているということです。こういうひとつの「仮説」ですけれども、これを頭に置いておくと、一見、複雑な精神現象が本当は単純な形で生じていることがわかってきます。

ビブリオフィリア逍遥遊 (6)

伊藤 敬

「戯曲資本論」を読む

古本屋歩きは、じっさいに店をハシゴして、思いがけない本を見つけるところに醍醐味がある。それかあらぬか、山口昌男さんにしても、今は亡き植草甚一さんにしても、その道の大家は、かならずと言っていいほど散歩の達人といった趣をもっているが、しかし、その病が嵩じて、通信販売に手を出しはじめるようになると、月に何冊も国内外から送られてくるカタログを見て、タイトルだけでいかにもこちらの気をそそるような珍しい本を見かける度に、一期一会の機会とばかりに、ほとんど反射的に見境もなく発注してしまい、気がつくとならばばらばら額の請求書と御対面となるだけならばまだしも、自分の整理整頓能力をはるかに上まわる本の増殖によって、書齋が足の踏み場もなくなり、あたかも「坂口安吾先生御執筆風景写真」とみまがうばかりの状態に化してしまうに至っては、もはや「古本病」患者に共通の末期症状と申すほかはあまい。

すでに末期症状に入ったことを自覚して十余年を経過したわたしの最近のめぼしい収穫は、オスカー・ココシユカの画集二十数冊を除くと、いわゆる「トンデモ本」の類ばかりで、福来友吉の心霊学関係の怪しげな本数冊、ナチス・ドイツの政策やムッソリーニを礼賛する戦前の確信犯的な本が十冊近く、「鬼畜米英」の本質を的確に描き出して間然とすることなく、一昨年9月11日の「同時多発テロ」以降アメリカが不名誉な先祖帰りを果たしたおかげで、六十年を経た今日でも立派に通用するのがおそろしい、並河亮著「百年の無禮」等々といった具合で、ならやたかしのマンガ「ケンペーくん」の主人公の本棚から抜き出してきたような本ばかりが増殖しているが、こうした本のタイトルを並べていくと、どうも、わたしは狂信的な右翼と思われかねない。しかし、わたしはまた一方において、アナキズムやトロツキイの著作も好きなのである。

そう言えば、北一輝の弟の北吟吉は、ベルグソンの紹介と右翼思想を共存させた不思議な人で、早大在学中のかれにフランス語の家庭教師をしていたのが大杉栄であったというエピソードは、ちょっと信じがたいかもしれないが、たいへん興味深い事実であって、明治末期から大正期にかけての人間関係の自由でおおらかな懐の深さは、こんにちの目から見ると、たいへんうらやましいものがある。

さて、今回は、雑然とした関心のおもむくままに集まった癖の強い本の中から、いかにも昭和初年という「時代」の雰囲気を反映したものとして、阪本勝の「戯曲資本論」という本を紹介してみることしよう。(ちなみに、この著者は明治32年生まれ。大正末年に東大経済学部を出て、大阪毎日新聞学芸部記者、兵庫県議、衆議院議員、尼崎市長、兵庫県知事、兵庫県立近代美術館館長などを歴任した人で、これはプロレタリア文学から出発した阪本氏の代表作のひとつである。)

この芝居の台本は5部構成で、菊判400頁を越える大著である。まず、第1部では、産業革命期に没落した職人たちによるラッダイツの機械打ち毀し運動に伴う労働者の悲劇が紹介され、第2部では笑劇風の(と言って、まったく笑えないギャグの連発に鼻白む)筋立ての中で、突然舞台中央にスクリーンが降りてきて、スライドで剰余価値論のポイントに関する講義が始まってしまう。第3部は、工場内部で搾取される労働者の悲劇が物語の中心であり、第4部では良心的な改良主義者の限界がカリカチュアライズされる。そうして、終幕の第5部では、恐慌による資本家の没落と労働者の蜂起が描かれるのである。

実際に上演すれば半日かかりにはなろうと思われるこの戯曲が、よくも悪しくも昭和6年という発表時の時代的制約を感じさせるのは、たとえば芝居の最中に、サイレント映画の字幕のように、何度もスクリーンが降りてきては、青木雄二の床屋政談ふうのエッセイに突然はさまれるようなマルクスの断片的な引用が、ひんぱんに行われることである。おもうに、これは、著者がこの芝居を書くにあたって、無声映画のシナリオを参考にして書いたということがあるのだろうが、現在の目で見るといかにも古色蒼然たる技法であり、このあたりは、あんまりできのよくない学習マンガを連想させてしまう。たしかにゴピノオ伯の「ルネサンス」のように、上演を前提とせずに戯曲形式で書かれた作品はあるが、この種の芝居は、面白く見せて観客に自らの主義主張を宣伝するところに主眼があるのではあるまいか。著者後記によると、「I 本戯曲は、カール・マルクス原著『資本論』第一巻の根幹を、戯曲の形式で表現したものである。

II しかし戯曲としての構成上必要な場合は、他巻の内容にも亘つてゐる。」ということだが、この「根幹」というのが曲者であって、マルクスやフロイトのように、生涯を通じて、かなり矛盾した主張を誠実に展開しつづけた大思想家の「根幹」をどう捉えるかによって、まったく正反対の結論が導き出されることは、往々にしてあるのである。たとえば、わが国に紹介されてきた、ロシア革命をお手本とするレーニン、スターリン系統の「正統派」のマルクス主義解釈からは、ルネ・クレールの「自由を我等に！」のラストシーンに端的に描かれたようなユートピア思想は、ほとんど想像すべくもなく、また、それがあえて無視され続けてきたように見えるのは、たいへん残念でならないと思われる。

(いとう・けい 図書館司書・学芸員)

ブレーキを踏もう

佐藤良平

連載5 映画のDVDソフトを疑う (その1)

いつまで続くかわからないデフレ不況の世の中だというのに「値段が安すぎる」などと書けば不謹慎だと思ふ人がいるかも知れない。しかしながら、昨今のDVD、特に映画を収録した商品の安さ加減は常軌を逸していると思ふ。誰でも作品名ぐらいは知っている古今の名作群が、高画質・高音質・特典映像でんこ盛りの大サービスにもかかわらず、2500円・1500円といった低価格で店頭に並ぶ。まるでバナナの叩き売りのようだ。「ええいッ、今度は2500円まで負けてやる！なにィ、まだ買わねえか。そんなら1500円！これで最後だ、持ってけドロボー！」と言わんばかりの値引き合戦が常態となっている。

とりわけ、昨年に一本3800円で発売されたばかりだったヒッチコックの代表作群が、今春になって半額の1900円で再発売されたのには、さすがの私も腰が抜けた(いずれも価格は税抜)。『裏窓』や『めまい』、『鳥』などの新品ソフトが2000円を切る値段で発売されたのは初めてだと思ふ。ヒッチコック作品の例を引くまでもないが、映像ソフト一般がこれほどの低価格で、しかも世界中で販売されるのは、人類史上初めての出来事である。

私は、DVDが登場するはるか以前からレーザーディスク(LD)で映像作品を収集してきた。LD時代の中期まで、映画作品のソフト一本の値段は大体7800円～15000円程度だった。LD時代の末期でも一枚4700円が限度だったと記憶する。もちろん、DVDが一枚4700円以上の価格で発売される作品は現在でも少くない。しかし今や、ハリウッド製の娯楽大作であればDVDが4000円以下で出るのが当たり前になった。一般人には理解しがたいほど高価なLDソフトを何の疑いもなく月に何枚も買っていた当時から見れば、まさに夢のような時代が来たと言えよう。

さて、現在の状況はどうか。たしかに、映画史の中で評価が確立している名画の数々を、それほど懐が痛まない対価と引き換えに所有できることの意義は疑いようがない。誰にとっても、文化を楽しむコストが下がるのはプラスに作用するはずだからだ。ところが、映像ソフトの値段が下がったせいで望ましくない副作用も起きている。現金なものだが、私はLDで観ていた当時と同程度の注意力を、DVDで映画を観る時に発揮していないと思う。懐の痛みが減ったのと比例して、見方の真剣さも減ってしまったのだ。DVDはLDほど愛着が湧かないのである。これは決して個人的な印象に留まらない。世間一般が映像作品に対して払う敬意が目に見えて低下したと感ずる。たとえ作品自体の価値はこれまで一貫して不変だとしても、ソフトを買った側はモノの値段に対してしか反応しないから、価格が安くなればそんざいに取り扱うようになる。LD時代には、その作品が本当に好きな人間でなければソフトを買わない、また買えないような値段だった。買えば買ったで、対価の元を取ろうとして必死になって観た。ソフトをおろそかに扱うなど、もっての外だった。

自分が本当に必要としていて、繰り返し見ると分っているソフトであれば、私は一枚に2万円でも3万円でも出す用意があったし、その気持ちは今でも同じだ。これが作品の作り手に対する敬意の払い方だと信じているからだ。正直に言えば、そうした覚悟なしに映像作品を私有するのは遠慮してほしいとさえ思っている。

よく言われることだが、映画というのは総合芸術である。脚本(ストーリー)・演技・色彩・音楽・衣装・メイク・時代考証・笑い・舞踏など、ありとあらゆる芸術の精髓を結集しなければ、良い映画は撮れない。どんな下らない映画であっても、そこには一度通して観ただけでは絶対に消化できないほど多量な情報が詰め込まれている。身銭を切ってLDを買っていたマニアの多くは、それらの情報をできるだけ自分のものにして真剣にソフトを見ていたし、LDはそういう努力に報いるだけの画質や音質を提供できる優れたメディアであった。私は今でもLDが好きで、実のところ頻繁に観ている。

元来、映像作品をソフトの形で手許に置きたいと切望する人間がそんなに多いはずはない。映画は一度観れば充分だと考えるのが普通だ。そういう人は映画を映画館かTV放映で観るか、あるいは時々レンタルビデオを借りて観るだけで満足するであろう。つまり、本当にソフトを欲しがる人々以外の客層を相手にして、必要以上に大量に売りつけることで、DVDという商売は大成功したのである。一旦そういう方向に業界全体が進み始めると、もうブレーキを踏む者は一人もいない。市場の動向に乗り遅れるな、勝ち組にならなければ生き残れないとばかりに、踏める限界までアクセルを踏み込むだけだ。

あるビデオソフトメーカーの社員氏が述懐していたが、ソフトの値段というものは、一度下げってしまったが最後、再び上げることは難しい。これは当然の話だ。私が心配しているのは、価格に対する消費者の認識と同じように、映像作品に対して持つべき敬意もまた一旦切り下げてしまったら元に戻すのが困難なのではないか、ということだ。映画のDVDを叩き売りしているメーカーは、自分の社だけが儲かって生き残ればそれで良いのかも知れない。しかし、映像作品に対する観客一般の意識を低下せしめたことに対して彼らが責任を取るとは考えられないし、また実際問題として責任を取ることなど到底不可能であろう。新規のマーケットを創出するのだ、テクノロジーの発展によって文化を広めるだのといった口当りの良いお題目の陰で、目先の儲けと引き換えに将来にわたって映像文化を決定的に腐敗させるとしたら、DVDという商品は百害あって一利なしではないか。(その2に続く)

(さとう・りょうへい 文筆業)

ヨーロッパ美術紀行

清水由美子

(4) アール・ヌーヴォーの建築とインテリアを巡るーブリュッセルー



どんなに用意周到な旅行者でもこれほどのプログラムを一日でこなすのは先ず無理だろう。地元に住んでいる強みである。いや、地元の人間だって私たちの過ごした一日の行程を見れば目を丸くするのはないか。何の話をしているかと言えば、5月のとある晴れた日に敢行したアール・ヌーヴォーの主要建築を巡るツアーのことである。

1870年代のイギリスのアーツ・アンド・クラフト運動の流れを汲み、19世紀末、歴史様式によらない新装飾様式として「アール・ヌーヴォー」が生まれた。この運動の影響は多岐に及ぶが、中でも建築は重要な分野である。

日本人にとってのアール・ヌーヴォーは、先ずはエミール・ガレの幻想的なガラスの花瓶などだろうか。オルセー美術館を訪ねていけば、アール・ヌーヴォーの部屋にある蛾などをモチーフにした、耽美的というか、ちょっとおどろおどろしい感じのする木製の家具類にぎよつとした人もいるかもしれない。また、建築関係では、スペインのガウディばかりが喧伝されている節がある。しかし、これらはアール・ヌーヴォーの豊饒な世界のほんの一部に過ぎないし、この運動が、20世紀の建築とデザインに対する革命的な地位を占めている事実が浮かんでこない。

もっとも、アール・ヌーヴォー様式は第一次世界大戦の勃発と共に姿を隠し、その後も装飾過剰で悪趣味なものとして長く無視されてきたという経緯がある。建築物は多くが取り壊された。再評価が始まったのは60年代とされるが、刊行物が増え、一般の旅行ガイドブックでも言及されるようになったのはごく近年のことであり、研究、保護、紹介の領域はまだまだ成長分野という気がする。

さて、アール・ヌーヴォー建築の第一号と目され、ウィップラッシュ(鞭打ち)・ラインを多用したインテリアが有名なオルタによるタッセル邸をはじめ、ブリュッセルにはアール・ヌーヴォーの建築が大変多い。オルタのソルヴェイ邸や、ウィーン分離派のホフマンのストックレ邸のようなそれぞれの最高傑作もあれば、ジャポニスム風、ムーア風、マッキントッシュの影響の濃いもの、等々、ファンタジーに富み、なかなかスペクタキュラーな町並みを作っている。アール・ヌーヴォーでなくとも、様々なスタイルの家々が並び、建築ウォッチングが楽しいのがブリュッセルである。

とはいえ例えばオルタの設計したアール・ヌーヴォーの家々はインテリアこそ本領がある。それなのに、ユネスコの世界遺産に指定されたオルタ作の4軒の内、一般にアクセスができるのは、今は美術館

となっているオルタ自邸だけである。それならばと、ブリュッセルのアール・ヌーヴォーを含めた19～20世紀の建築の研究・保護の第一人者のバンデンブレイデン先生に案内役になってもらい、先生のコネを活用し、厳しい条件を飲み、普段は見ることのできないインテリアを中心に見学する夢のツアーを実現した次第である。

実は、この企画は、当地の日本人会の文化活動の一環としてのもので、美術関係のイベントに関わらせてもらっている私の、いわば個人的な関心と、あれも見たいこれも見たいと言う欲張り精神がかなり反映してしまっているといえないことはないのだが、4年前の同種の企画が大変喜ばれたため、再企画と相成ったのである。

前置きが長くなってしまった。バス2台に分乗した60名ばかりの参加者と、案内役の先生、そしてこの分野に強いプロのガイドの3人が待っている。オン・ニ・ヴァ(行きましょう)。

EU関連のオフィスや近代的なビルが連立するカルチエ・レオポルドは、悲しいくらい昔の面影がなく週末にはすっかりゴーストタウン化するが、その延長上の、19世紀の最後の4半世紀に開発されたカルチエ・ノール・エストは、緑多いスクエアや人口の洞窟のある池なども擁し、なかなかビトレスクな地域である。1890年代になると新興ブルジョワジーが押しかけてきて建築ブームの舞台となり、フレミッシュ・ネオルネサンス様式などの歴史様式に混じって、おもしろい台頭してきたアール・ヌーヴォー様式など変化に富んだ建築群が生み出された。

バスの前方にひよる長くバロック的な何とも奇妙な建物が見えてくる。最も有名なアール・ヌーヴォー建築のひとつ、サン・シール邸である。オルタより一代若いストラウヴェン作。両隣の家にはさまれ間口はたった4メートルで、大胆な曲線を描く鑄鉄と最上階のベランダ部分を成す巨大な「目」の形のアーチが特徴的だ。装飾過多の典型かもしれないが、遊び心に富み、なかなか楽しい。朝など霧を通してこの家がボウと見えたら、妖精の住む家のように見えるに違いない。

当地にはこのように長屋的にすきまなく連なる家が実に多い。ブリュッセルワは、パリ風的大型アパルトマンに住むことを好まず、両隣と壁がくっついていても一戸建てを欲しがらるのだ。狭苦しそうに見えるが、奥行きはかなりあるし、さらに後ろには庭があり、なかなかリッチなものだ。一方、資金が豊かでなくとも、表に出るファサード(正面)の一面だけを立派にすることで見栄っ張りの彼らの体面を保てるわけで、都合が良かったのかもしれない。

難点は、家のつくりが鰻の寝床のように細長いために、真ん中の部屋が薄暗くってしまうこと。あまり健康的ではない。この問題を、家の中に「光の井戸」を設け、天井から自然光が入りこむように設計することでクリアーしたのがオルタである。この天井を貫いて入ってくる自然光を美しい緑色がかかったステンドグラスのドームを通すことで、幻想的な世界を創っているのが、この次に訪れたヴァン・エートヴェルド男爵邸である。世界遺産のオルタ作品4軒の内の一軒である。ガス会社のオフィスであるため通常は見学はできないところだ。

多くの客をもてなせる家の設計を依頼されたオルタは、男爵の進取の気性を直ちに感じ取り、むき出しの鉄柱をファサード(正面)や室内に大胆に取り入れた。後のモダンなビルのカーテンウォールを予告するのっぺりとしたファサードは当時ずいぶん斬新だったに違いない。訪問客は、入り口の小さなホールから入ると、ガラスのドームを冠するウィンター・ガーデンを囲む階段を上がり、回廊を進みサロンにたどり着くまで6回方向を変える。眼前には必ず斜めの空間が現れ奥行きを感じさせるし、かなり歩くことで実際以上に大きく感じさせる演出である。オルタの空間処理の巧みさには舌を巻く。(続く)

(しみず・ゆみこ ブリュッセル在住)

編集部註：写真は「サン・シール邸」

『知』のレッスン

2 レトリックのトリック

榊山裕子

大分大学の中野昌宏氏のサイトに「本日の格言」というコーナーがあり、これが最近のお気に入りだ。たとえばこんなのが出る。「正義はジレンマである」「解脱は人工知能である」・・・なるほど、確かに。どういう仕組みになっているのかは知らないが、ともかく「AはBである」のAとBに一定数の単語が登録されていて、それがそのたびごとにランダムに組み合わせられて出てくるようだ。人が容易に考えつきそうな組み合わせはつまらない。かといって白々しいまでに無関係でも面白くない。人が思いつく組み合わせのそのちょっと先、言われてみると、ああ、それもアリかな、と思えるような微妙なライン、AとBが微妙にくすぐりあうように重なりあい、かつズレているそんな感じ。そのズレは、時間で言えば絶妙な「間合い」に相当するだろうが、どうも笑いを誘うのは、そのズレの在り方にあるようだ。

あとほんの少しで面白いくらいにイケルのに、微妙に笑いを外しているように感じられる時、近似値の言葉の組み合わせを自分で考えてみようとする。しかし人為的にやろうとすると途端につまらなくなる。自分で考える時の思考の癖がでてきてしまい、それが言葉の飛翔力を妨げる。何よりも自分にとっての意外性がなくなるといって面白味が激減する。自分の心は無心の状態において、脳みそをシャッフルして、ポンと口をついて出た言葉を記録する、ということができればよいのだが、なかなかそういう境地には行き着かないようだ。子供の頃に一人じゃんけんを試みたことがある。無心になって、右手と左手をランダムにじゃんけんさせようと何度となく試みたが、同時に二つの人格が互いの存在を知りつつ、互いの思考はわからないように存在するということは難解な高等技であるようだ。

ところでこの「AはBである」という格言製造装置は、隠喩製造装置でもある。何かを別の何かで喩える場合、それが喩えであることを明示する場合と、それを隠す場合がある。前者は「直喩」、後者は「隠喩」と呼ばれている。

前者はたとえば「彼女は薔薇のように美しい」とか「異教徒は悪魔のように残酷である」と言う。それに対して後者では「彼女は薔薇だ」とか「異教徒は悪魔である」となる。すなわち前者には両者の比較の根拠があるが、後者ではそれが消去されている。その消去こそが意味に多義性を与え、そこに隠喩の詩的な効果が立ち現われるということは一面では確かなのだが、ただ問題は、隠喩は詩的な表現の中に美しい標本のように封じ込められているわけではなく、常にわたしたちの生活空間の中に空気のように存在していることだ。たとえば、彼女は薔薇だ、と最初はその美しさを愛でる新鮮な比喩として語り始めたつもりが、彼女と薔薇を重ね合わせた瞬間から、薔薇の属性が一人歩きをはじめ、彼女を逆に規定し始めるかもしれない。たとえば「きれいな薔薇にはとげがある」というが、この「とげ」が彼女の心身の端々に幻影のように見え始める。それでいてそれがこの隠喩がもたらした効果であったことには一向に気づかず、彼女の方が変わったのではないかと、思うかもしれない。あるいは「薔薇には虫がつきやすい」というように彼女にはどうも華やかな噂が絶えない、それがどうしようもなく気になってくる、といったこともありそうだ。そうして最初は自分が作ったはずの隠喩に自分自身ががんじがらめにされ、あらぬ妄想や嫉妬心にうなされる、という本末転倒が起こるかもしれない。

そういう意味では、先述の「異教徒は悪魔だ」は更にたちが悪いレトリックであるだろう。悪魔の属性が他者に全部かぶせられるのだから、恐怖に裏打ちされた憎しみが全てそこに向かって噴出するとなれば、相手もたまったものではないだろう。しかしこうしたことは実は巨大なレベルで公然と行なわれている。最近ではブッシュの「悪の枢軸(axis of evil)」発言などはその典型だろう。2002年1月29日一般教書演説で、戯画的ともいうべき勸善懲惡のレトリックを駆使して、彼は「北朝鮮、イラン、イラク」の3ヶ国をこのように喩えた。

先ほどの薔薇の例に戻すと、彼女が薔薇になるだけではなく、薔薇が今度は彼女になる、という転倒も容易に起こり得る。たとえば彼女が愛した薔薇が、彼女の代わりにかけがえのないものになるというように。人は人間以外のものに何か親しみの感情を寄せようとする時、ものを擬人化するようだ。逆に言えば人間を人間以外のものと見立てることによって、相手への攻撃を容易にするということもまた可能だ。先ほどのブッシュが用いたレトリックなどはそうした効果が十二分に意図されていたはずだ。

自分を困む環境もまた擬人化によって語られる。たとえば「山懐に抱かれる」という時、山は擬人化されている。ただそれはあくまでも人間中心なので、暑さ寒さも大きさも小ささも人間の基準に沿って考察されることになる。たとえば優しく頬をなでるそよ風も、ジリジリと刺すような太陽も、人間の身体感覚を基準にしている。だがそんなことは相手方の空気や太陽にとっては与り知らぬところではないか。それらは別に優しくも攻撃的でもないのだから。

かつて読んだSF小説に、こんなのがあった。地球人が宇宙船に乗ってある星に降り立つ。ガラス窓越しに映る光景、それは母なる地球とは似ても似つかぬ、高温で、熱風渦巻く恐ろしい世界だ。とても人間の住めるところではない。しかし地球人である乗組員はその星を探索するために、その環境に順応しなければならぬ。彼はある機械を使って自分の身体をその星の環境に適合する身体に改造する。そうして生まれ変わった彼の目に映る外の世界は、さきほどとは違って変わって、くつろぎと心地よさに満ちた穏やかな世界である。生命をその一吹きで根絶させるような熱風は心地良い風となり、灼熱の熔岩は小川のせせらぎとなる。不毛な赤茶けた大地は、肥沃な農土に姿を変えている。つまり彼自身の身体が変容することによって、彼の心地よさの基準が変わったのだ。順応すべき世界を心地よく感じるように。

そうしたことが実際に起こり得るかどうかはわからない。そもそもそのような世界に順応する生命体が人間と同じように目という器官を使って物を見ているのかということさえも実は定かではないし、同じような感情を持ち得るか、こうして変容した彼が地球人としての自分にアイデンティティを見だし得るか、そもそも彼の脳は以前と同じ状態であり得るか、などなど、あれこれ考えは尽きないのだが、まあ、ただ言えることは、人は自分の居心地の良い環境を愛で、それを「美しい」と感じ、そうでないものを恐れ憎むということだろう。身もふたもないことだが、たしかに人はそのように世界を見ているし、そのように世界の中に存在し続けるしかないのかもしれない。

(さかきやま ゆうこ 芸術評論・ジェンダー論)

SÉMINAIRE OUVERT 2003

Le 9ème SÉMINAIRE

FUJITA, Hiroshi (psychiatre-psychanalyste)

samedi 27 septembre 2003, 13h30-16h30

SALLE#509 DE LA MAISON FRANCO-JAPONAISE Frais de participation:1000yen

Renseignements:BUREAU CULTUREL DE L'EUROCLINIQUE TEL: 042-308-7637 E-mail: ys@euroclinique.com

公開セミナー 2003 『心的構造論』

第9回第9講:「多世界論理と精神病理(その4)——多世界としての性倒錯」

藤田博史(精神分析医)

2003年9月27日(土) 13:30~16:30(開場時間も13:30になります)

会場:日仏会館 509号 聴講料:1000円

問合せ先:ユーロクリニック文化部 Tel: 042-308-7637 E-mail: ys@euroclinique.com

*予定は変更されることがあります。詳細はユーロクリニック文化部までお問い合わせ下さい。

Séminaire Privé 通称「フジタゼミ」

藤田博史によるプライベートゼミ、通称フジタゼミが、原則として毎週木曜日に開催されています。自由発表の場

トピカ、原書講読(現在はジャック・ラカンの未公開セミナー「ル・サントム LE SINTHOME」の講読)などを

行っています。語学力、資格は一切問いません。今後の予定は随時「精神分析医 藤田博史の公式サイト」に掲載されます。

サイトアドレスは <http://www.fujita.com> です。なおインターネットをご利用でない方は、ユーロクリニック文化部

まで電話でお問い合わせください。

今後のフジタゼミの予定(変更されることがあります)

- 第58回フジタゼミ 2003年8月14日(木) 19:00~22:00 備屋珈琲店恵比寿店会議室(恵比寿)
- 第59回フジタゼミ 2003年8月21日(木) 19:00~22:00 喫茶古炉奈会議室(秋葉原)
- 第60回フジタゼミ 2003年8月28日(木) 19:00~22:00 備屋珈琲店恵比寿店会議室(恵比寿)
- 第61回フジタゼミ 2003年9月4日(木) 19:00~22:00 喫茶古炉奈会議室(秋葉原)

SÉMINAIRE OUVERT 2003 Journal Mensuel Gratuit No.7-26

月刊『セミナー通信 2003』フリーペーパー版 7-26号

2003年8月12日

発行 EUROCLINIQUE

編集 ユーロクリニック文化部 榊山裕子

tel: 042-308-7637 E-mail: ys@euroclinique.com

メールマガジン版もあります。E-mail: seminaire@mac.com までお申し込み下さい。